



時代
摸画

能家奇人譜

下

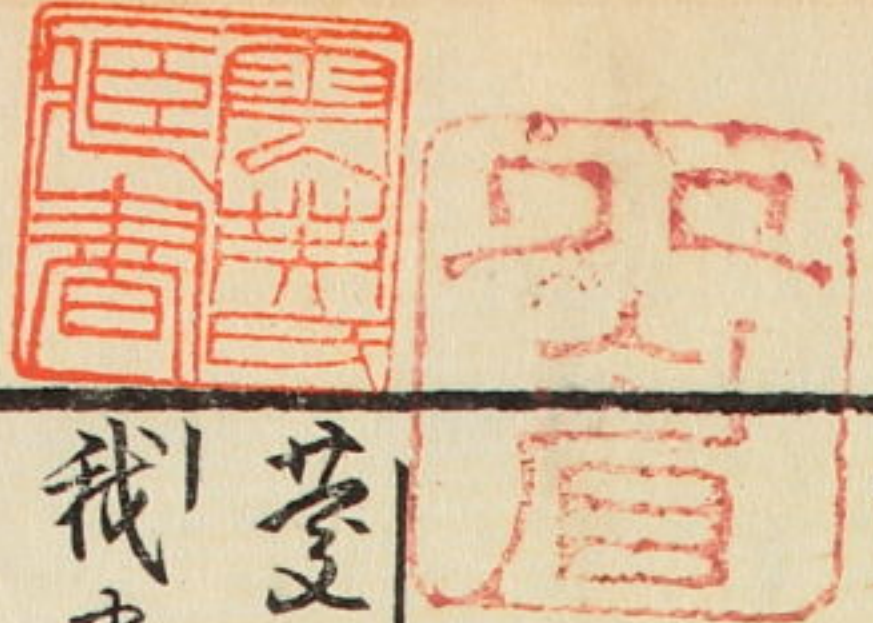


能家奇人後世之下

竹窓玄玄一遺稿 蓮屋書事 冬行

中川乙巳

夢神谷出の勢陽山田の社司此ち姓名を愛して中川梅
我あこ乙巳と改む^{つね}限極のん^{きよう}清一て凡人を念する
夏我嫌ひ^{きら}唐を妻^{むす}相^{あひ}此^{あひ}百小^{あひ}管一^{あひ}冠^{あひ}ら号一^{あひ}そ妻^{あひ}林^{あひ}舎
こいふ此子^こ蕉翁^{あひ}の末^{あひ}弟^{あひ}一^{あひ}くそ^{あひ}双^{あひ}後^{あひ}ハ支^{あひ}考^{あひ}涼^{あひ}翁^{あひ}等^{あひ}
後^{あひ}ぢ^{あひ}一^{あひ}始^{あひ}末^{あひ}に^{あひ}個^{あひ}と^{あひ}荒^{あひ}壁^{あひ}に^{あひ}着^{あひ}れ^{あひ}は^{あひ}ド^{あひ}多^{あひ}や^{あひ}飾^{あひ}纏^{あひ}一^{あひ}等^{あひ}婦^{あひ}
此^{あひ}肩^{あひ}ふ^{あひ}る^{あひ}人^{あひ}や^{あひ}衣^{あひ}る^{あひ}え^{あひ}一^{あひ}り^{あひ}秋^{あひ}を^{あひ}送^{あひ}く^{あひ}ま^{あひ}母^{あひ}に^{あひ}お^{あひ}禁^{あひ}る^{あひ}か^{あひ}一^{あひ}等^{あひ}
面^{あひ}を^{あひ}鼻^{あひ}のか^{あひ}ま^{あひ}ま^{あひ}ぬ^{あひ}密^{あひ}る^{あひ}か^{あひ}一^{あひ}等^{あひ}か^{あひ}も^{あひ}深^{あひ}れ^{あひ}ま^{あひ}砂^{あひ}や^{あひ}多^{あひ}等^{あひ}就^{あひ}
群^{あひ}一^{あひ}そ^{あひ}ま^{あひ}う^{あひ}る^{あひ}ハ^{あひ}よ^{あひ}把^{あひ}拍^{あひ}を^{あひ}笑^{あひ}出^{あひ}一^{あひ}り^{あひ}り^{あひ}山^{あひ}横^{あひ}一^{あひ}采^{あひ}味^{あひ}を^{あひ}我^{あひ}
と^{あひ}淋^{あひ}い^{あひ}る^{あひ}飛^{あひ}で^{あひ}り^{あひ}老^{あひ}後^{あひ}の^{あひ}諸^{あひ}作^{あひ}も^{あひ}不^{あひ}拘^{あひ}理^{あひ}を^{あひ}こ^{あひ}里^{あひ}正^{あひ}風^{あひ}の^{あひ}ま^{あひ}ま^{あひ}を



得る里に或時裏林舎又葉園にて入来る客阿里いはく
我能潜我学と記志あ水どもそ式むつうく覚ゆ下おの
者ふと道入るきも限阿里やと答く曰く志さん深切
なれははぢみ六ヶ安らるるもあらじ又ぞおぬ句何様
更我申しはるや答く唯眼前の風景を云はるはれは
一句作くせせぬ安らるるなりと云う我ははるはる
おろきも事ふて歸んかふふ男れいと寄げと能打くと
初を掲げて阿まぐ便ちぬ句の姿ありとて百姓若衆
かぐげぢさむけり奈又附合れ轉變に及でハ當時人の右
出落者なりといふ家小云うらの家信阿里一年涼着を利
考うて支考乙使今我催すは花の息を争ひしおはる老
僧の形を俳句とみせて並といふ妙句を吐くいふで此句又言

郎ふらんやと各冷汗なりたるに親友のけし何い存と
能筆その句我度これ一産ありまびきまをいおぬ
一たもてるはぼろ小拭ふてう月と板いりみふとのふ
おろり支考我掲く一き僧の良我松は又とと
息を答む考答く一生れすこ里句とあふんる我思む家
い妙句を惜むる里といふりいといと母を添う里し或人
依依の百額ふるいとい何の玄嫌いいうやうやと存
我々左様けるりきんに僕もは夏涼く知んとあらば先
編おける出ども我求く又と申りる是と初んは
用を寄る修り我すにせよといふ龜澄とわぐきと云ふ
んる又と又と又と又と又と又と又と又と又と又と
いども又と又と又と又と又と又と又と又と又と又と

連中



上之用心

紹直筆

文人客老まきバ句作もたれづるにむすむる能らば抄書に托里
小異成儀——三弦ひく傍——案ずる時の生變化は後れず
我も世塵は苦んぢに佛道に志を寄る者あるに終り——身
成終るはで遊興を度すにとまん一日戯場くは——小お儀
なる娼妓隣家へ来居るが後の小打混し終日酒酌を
——け全次めりも亦同律の人何とくもなりけるに又むふの
寂寂に時日の娼妓来里舞臺子あど宿里すれ——夏ふど
中き——る時「涼州」や夕月何ちふれ岸又暖とる詠どけり
片水を托里托里と老の身と隨居すく古人の心を誠むるに
生歌ふ人よふまに能り此子名知れい生興を覺て生謡
に能らばといふは——や活の園文が記——生云をまともそは
仍い我もぞれば生人我解すくもはとつ人雲波が物語を
海に何より強るよ——載——海も証とす——

金羅

之羅の以金羅ハ浪客——住——て實と種ふの名を以て
若あり「浦の穂や倒——里たる朝の妻」必葉れそるふこ
畑や九月屋を宿を傾け——依芽が朝陽をうけく雨露
を渡ぎる流成をく種とて実——儂石の儲ちくつま
女と隠巻を托里金羅の如枝その風流を傳へ笑その度
成付ひらに幸ひ羅とあるまき目此書席まで傳里
後けぬ危る——て後も雲く成事水で字す立飲食の致け
ま——枝憶うぬ——何ぞ後ふさぐおや何ると居居する
小羅あ——壁立此家あうけづれたつ物なり——儂や替
ゆある紙袋——米の何ふば替るおねらせんを校——

之を掃るに漸く米計合はうりも何んといふ羅田く生
米まで田人の口糧を害すはなすれは後娘らるる種々
ははわらせしと枝葉あがらも生機量の卑劣なるをば
感ありさうや武年此より勾堂へまじり又よ
玄つて交りし杜吟して限里尺のを唐若却而は夜盜
のうりて盗りれどもうらけひぬる能い入るき而も有
屋なり仕合のちを考うていられども是ぞとん掛くる
うや大なり此聖あくあなり「ば」盗も活かなる所あら
能はとありてお針やのそは佳佳材はの地は居らる
いて「ぬすまれ」手扱を考う「何交なり」と
を盗屋まゐぬ屋

霧川村

霧川村の伊賀村人なり「尾の名渡屋」すゑり蕉つ
の古老なる時人いひく「金城ふ枝所り護城に霧川
ありと称しち里さうや「有てな相角あり」ろや恒牛
「板屋や岩く東くおるきまぐは」移く「鳴や櫓の
音る此は」粟刈のたぐはくす種菜うあ妙算双して後
私伝をかまへ「異風哉」とあるふ流の支考は水を發して
送まる又何り名く霧川費といふ川流と返答の忠
作く「吾輩を解く」是を名く合相機と号は

言雖百里 附琴風

言雖百里の魚を驚く業と云はれ句出れ又は曰く我始々
蕉つ又入里「時」茅風といふり後雪中居るさうして
三十六年又いふく蕉つ「松風仙風何り仙風を不世に

世に十一二歳の友あり後嵐使を命成文と云々廿一歳
百里と改む今日又對面では能く一日と絶す二三日の夜
すまゝに張くばらざるに精々依極門戸後世一衣はる一
摧起りり弱體沾徳注して云く弱體の何れをみえゆると
素後素朴ての後と云々至るて云々此終入るり此子家
家に在るに調理を能く作する物との肉を耳なり喻
るに抱くる至る一室我舎して弛張すはる酒の烟人此室に
而る一室の時に終日終夜といふとも云々種を多く人すと
其素後るて風流なるる又都の如く享保十二年五月
六十二歳にて死に辞世死に盡て涼き月をみるどし
其子素後るす種後何れを云はる一巧あるはと後世人の
知る所なり

琴風と種波の人何れの如く江戸へ来り種波のつ
阿そふ沙段して後晋子に後く學ぶといふ如羅架と号に
其素後眠る居る柳の家一室食やいふけふ死す後
ら何れ一猶此素後と云々は素後る一買時又する白
其素後り當時琴風百里と云々種後考く有る
其素後病む死に辞世一息は此味ひと素後る
其素後

津川源十

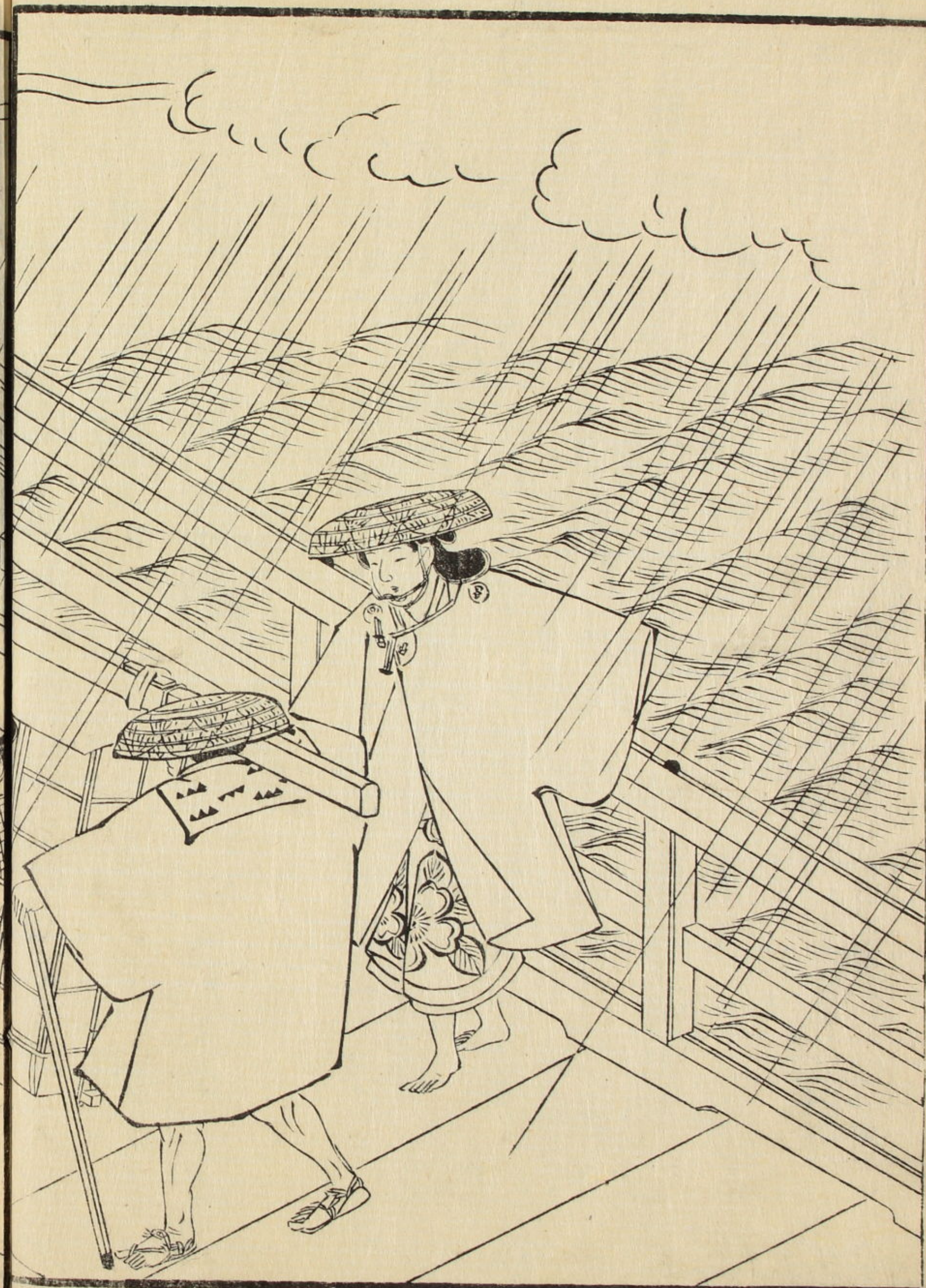
源十は江戸の人晋子と後く業を交く初め源十は恒
より代く此後氏といふ幼なる時に選山といひ後老翁と改
免又胤肝ともいふ一梅が素やゆけく生れぬ井の源
「志をくくく雲の急なり」一梅此素後掛の母のを「君は
其素後」然坂の長刀何れを素後る素此人容貌異作なり

落髪して髪のはけ尺餘身ゆゑ法衣を着る一頭より
僧坊に掛るる金銀の物おきて平生の積り成程
その性冷然を好む天目酒一盞成て度とす確生は
又此世あり人との確る時成るるなり一又三年
六十餘年して終り

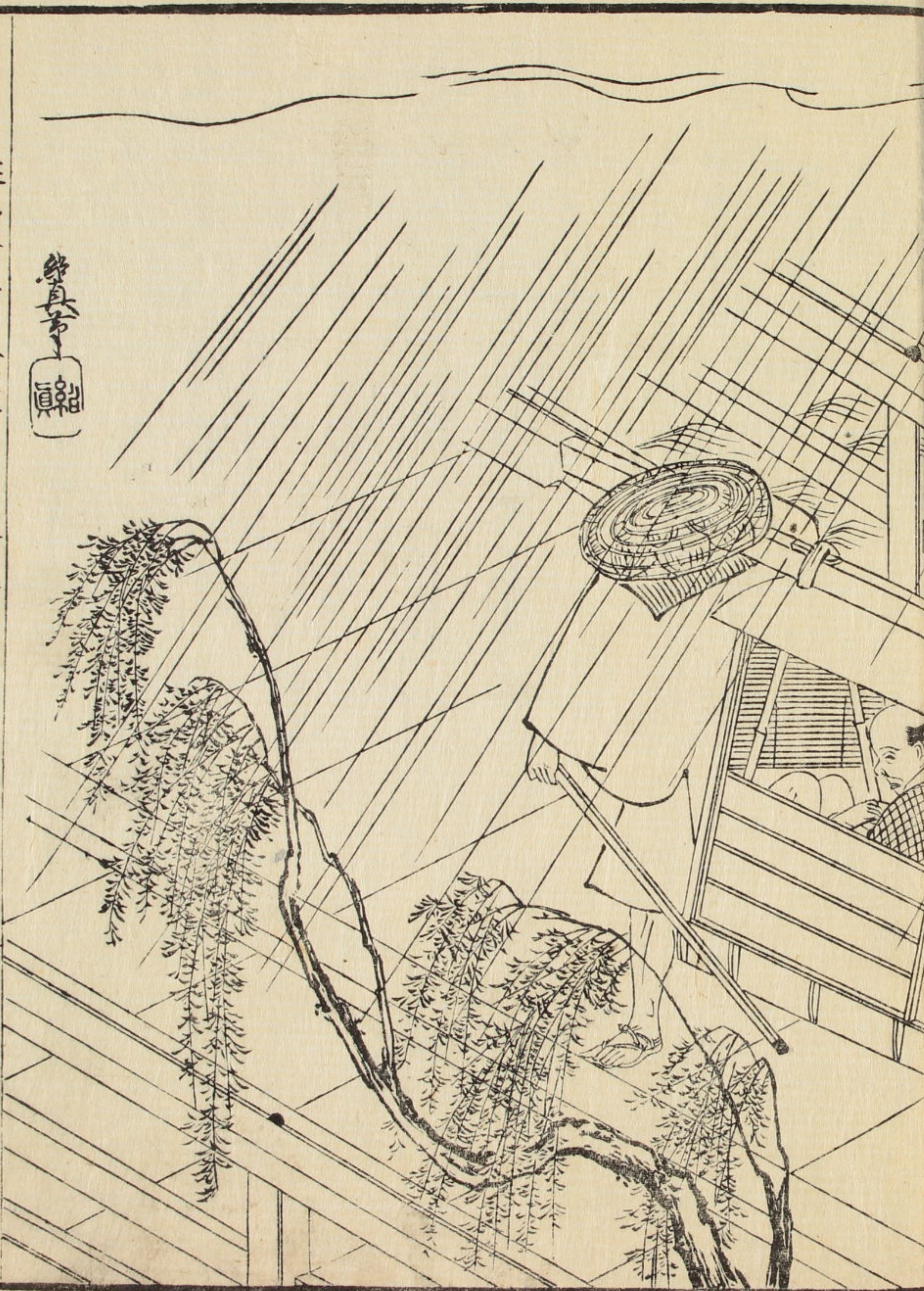
秋色

秋色と武に名人はどめ照陰町菓子屋大目が妻と
好む秋といふ少なり風流のせり有る十三歳
去上時の夢より清く清水と観音堂にうら井の端の
をみて井戸端の横へるなり酒の酔ひは酒の酔ひ
に切るおはるる本くお附るは奇極句成目く
なあり名甲乙を降しおひお世句おまてそは

秀逸ふ極りぬ後代まで秋色横と名をまへもは
宜なりはや晋子入りの時一語を金子氣に並ぶ女
逐ふ業成るるつとに翠簾けけく誰妻なるる涼
「ふのふの紅禁より里に女この」獨居やまみ火并も
半は伽沙豊徳年投湯してあけと冬す多の秋色
家成るとはありそ致後志あふく沙窓息官を備り
用中晩年又ぬる湖十は是を惜みすといふ一年何
侯の山花は石橋を庭園若く一葉落して秋観せ
あゆ色が父さいさいの折とそおれは身を屋川に
修るる心はるるが折るる雨をけく降るる一版を
樂成常として送らせらるる魚父の性一そ年若く
學界ともに用変のつけそお父と入りりる紙合



終身
眞



海に竹子笠うちぶ里裾高く引上げ常々満く限り
 知る者文「ありや」ごとき孝「て板なるより大率
 此類なり享保十年四月身ほりぬ詩世「一」後の光
 ても色なり記つばと

紀文初子

紀文江戸の人同苗紀伴五郎又たつと紀の熊野の産
 武蔵人出てより以来父子ともに大い「ぬり」又「能勝我
 多」んで晋子「う」学び父を敬愛といひ子を山といふ
 「人」のけむ松字津の枕「一」更「や」年の種どもお母は
 敬愛は句「る」人す老の眼や古用千五元集「千」山初
 室舟の終「る」角「隅」又「果」を「さ」る「あ」も「ぬ」る「く」
 千山「年」忘「一」割す「や」八乙ぬ「神」楽男「あり」蓋「世」

急衝北進興のみを唱く空風海あるる我称を記

櫻井吏登

櫻井吏登江戸の人嵐叟に結くはあふ園竹をその言
 才「る」が「あ」小「妙」又「致」あ「ふ」重「忠」市を附「ふ」せ「ら」は「い」
 ども「已」限「一」老「た」里「と」今「一」伊「ち」之「我」堂「は」懐「る」因「く」此
 子を以て雪中二世に神人左「あ」と現象ともい「り」
 嘗て衆の勅「は」あり「と」荀「且」に嵐「雪」といひ「一」が種「あ」く「又」
 吏登に更む老後「你」川「也」臨「れ」巷「り」ト「着」き「う」以「り」あ「ふ」二
 校「を」あ「め」み「て」出「れ」つ「と」枕「を」重「が」実「に」種「を」容「る」の「席」
 も「な」一「宿」東「く」陰「陽」時「を」お「れ」る「と」糾「る」人「へ」さ「と」何「と」
 はず先「の」密「い」つ「る」枕「は」く「て」風「結」す「と」素「ん」い「う」も「密」
 小「い」う「も」清「一」空「風」韻「の」幽「玄」なる「尚」時「は」和「す」休「者」あ「く」

實小陽春白雪とや稱すべし一統る銭為より我より句
たしと教軍の源系を棄てて唯十八歳戎擧びぬると
奈里「梅咲く阿のり小喜ハたり里り」大竹やんをぬむ
い記ふ六月「至す」記ぬいほのくと昭あぐり「老の秋唄
六を唄おもあ所さ又自像自像」おく我や何ふなれとの
古茄子室曆四年六月廿五日銭以く卒る

水間治徳

水石次宿意ハ江戸村人その磨工と里一耐より能満を好
る云戎少くは杉原ハ風虎を治二公此例も列里一
一年 飛鳥井種奈ハ和舟の夏ふより奥宮岩城くた近
時露云その爵回を慰おわはは伽の老戎擧げせらる
み亦荒く我武吏妙みゆ名公露上達のおふハ我に

如何す人れと思案のわうら流をたつを建る者阿り
は是くふく此旨信里とせ利髪をくろく是戎我我
彼は二年ほど配所ハたしるるるる夕は例ハ付く和舟
古き夏とと懐あふく居居せ里とと種ふく帰治一玉ハ
我我ふむりて因りハ油うたしハ和舟ふハ月ハたし
只能満妙みを修りす屋一と生生れたしハ清勢ハ
阿家よりまんぬ一「直ち小露公の教を受はしめ露公といひ
後治徳と改む日く夜くふ上達一遂一「風銭記一享保の
治といハいを以くせり「唱り合飲案と号ハ「えハと振人を
アハる振ハるハ後地宿ハるハ「振ハるハ種を喰ハるハ又ハるハ
や振ハるハ「治相阿ハるハ「魚一「て網籠の益ハ水と羽と合ハるハ
夕すハみハ人能ハるハ「夜ハるハ「長ハるハ「とて餘朱餘毫揮毫

何よりと云はれ去りて奉りたる當年は及公雅政の職に
補せられぬのちには存候糾きより寵遇化はる
或時公「是れ夜や長居をふく子孫と戯れの内殿は應て
「政の齒を立にけり」云ありたにこれは世も是と違ひ
よく次才小繁留して匂う千金名圖成る王正徳の初久堂
御より演説く轉也する時法才は借法を序附てと云出
「六月の晦日家裁はらひふるもよく京橋邊へ地安成
市へ移居に移る官家より江戸中の居宅成丈七
進へる屋へ」と清洲河原より便ち至有の後ひあつたり
翁達中を成たりり裁極もなく類焼して数年著述を
何より成失いぬれども有破海きよくんあ等今世にけり
此人は録中又法橋に進み京橋中法眼へ昇る能き法
眼とばり里出たる此人は限ありて一始め生に男辰
角飯倉町小河家の養子と云候姑は氣樂むつゝとて
出きと云を満く「延王火ういぶ」て潤ふ又けむい
め残すれば麻安た故きう終り「おと書家へ席へ八十
をるそ率き里とど晩年居候銀治橋つかは移すまに
愛國して一流をたはは成化と云と稱す皆人の知所なる
宝暦三年六月九十二歳の壽を終る祥世「京橋の素子
裸へ返りけり

大高子業

大高子業は播磨赤城北土郷市成津徳小坂京飯「目小居けく
いざ岩いれう山橋「初りの江戸北岸子と旧来の汗並角
子ふる城壁をうつゝる人れは成集る小「徳王又新右名や

句後合于時海士同人して漫筆の曉沙此れ人緒る虫

其後と彼とは世に音聲中言の何れは松は堅き又音威は

いや事来は思ふ所成の一面りお侍人中の柵を拙者

取存の節難題止今曉なる中の曉はたは厚情彼を

生く世くぬ及ぬるにゆえ人山我我ちるもわけて松れ

富強く素帆竹等も同じたふてい滴露とは存の如く

は君備君備堂中へ文にてそ徑打捨壺中の一句は利導奉

頼い 十二月十七日

子禁

法徳先師

明る年北去合欽崇ひて追悼發句一を抄に毛程法徳先師

うか法徳先師一此幸子師と調う素其南一枝禁法で名残の雲

北光うか法徳先師一此幸子師と調う素其南一枝禁法で名残の雲

此雲初とつく一此と梅は文武具る素湯子向山毛子禁法

素の我嘴一此と又その句作素素松出来より一とて持信

一重宝寺一此と素素士何果の記わたり

加藤良松

加藤良松と此と松は文武具る素湯子向山毛子禁法

顔の猩猩庵と号す此と又その句作素素松出来より一とて持信

後と得る我修す初め若く一此伊賀松阿弥津小進を松

上妙と一此と虎葉居士と句稱す老後松活人出く宗妙

と素松の子法号つ人個房の号り頂一此と一松字一詩

費や此と命と松のまこと主瀧落可思香く妙な古れ信来

骸骨を画装成をふ素より松と針と漸く一此と一松字一詩

や松は雲のふりみつ筆を擲て年死に人此句をやりて

辭世と爲といふ時より寛保二年なり

系えり個所と稱は松浦八幡の人を系松はあふを性
仙成好ぐ意氣憤慨すは個す人より維倫す一怪くと
引ぬ修く月天家一初雷や舞の影の影み有り世無
仙士の属の何上げ里けら一

茶園子に絶えたり
て室に置けり

松本澄澄

松本氏に江戸若人番子と稱く屋を移る初め渭北と号し
時若生席仙宿と名にけり大又と安記已と覺て半時
席澄澄と改名一徳子の室より仙宿とお對して起
人此身同成疑るせり金仲英邁の才何のて坐接も及び
ちた老後を極く金享侍は比名に才小雲ふ江戸小ての器
人半移を子より一浪遊るその奥洞裏天我澄澄と人なり

能得此句あま我弘く一沢鯉の春城は蜘蛛の糸より一素業
はれバ思ふ年一夜止れ句を種ひちて此奇を多く老
衰にけりいひ下の句は二月中旬は似を種ふといふ古
我あまを冬と表そのゆひど冬をいつる何まも言我屋
たる吟詠なり時より室曆十一年霜月八十八歳よりて死
す旧来は冬より死する月を定る係中一霜雪や枝
で画が記一素士雲山と作玉並一が時月符は我合ふ係と
亦あまを此子はドめつあふ出の句にて一梅は雲あふて回
梅のちものつ中示して二丈き一む攀く曉る者なり室
小異後無至席といふ能友なり此子初なる後その奥に
一箇に梅二本とらふ句我碑は取つけり是を名く梅
て梅堂の句解一たりとあふ云あふの縁を我問答する

四馬五羊六龍七雞九雅

番勝

懷紙勝



九更

三月四日

三月四日

鳥

四

一點

山

銀

五

○

一點二半

雅



金

六

一羊

魯



雞

七

二

今日存字

一日長安花

○

紅色

字



萬國三冠
三拜冕旒

珠

蜀江歸

志

香

買

金綺

吳綾



龜背

王鳥羽



鳥



俊

龜背

小可

回雪

まのめ

米

大極

新月色

次仲

長

蒼渾

同文錦字詩

田

田十 桑 桑 六

豪

鯉漢

平

花影上欄干

米麻柳

師王鳴

米

師王鳴

明陽鳳

牛時度

京



龍

國

生枝玉

元門

桑

へ里と後多勢我殺害一此曉くこ小西門片一て引名
 云れくまゆふと掛ひ先日春帳が後里一殺句の意すゆ
 何人とも必らるる中に渡候し己湯へも入らず形ゆを
 直一了縄は里或は鋪に入りきる一様をばめらる
 才何り今給あす里小倉卒れりゆ名候は持来らず後日
 お遠なく拂度一す賃とて此羽織片一並ありこ
 何某候よりお領の物ぬひで巻一己を泉岳寺此つあ
 いたり言候はけ中に面賣店や花屋に大言店や花
 簾酒やおらせし一連せてあぐと叫りや 客家あり
 教養候は武士何あそ某里門戸我等く入げ里る後す
 なくてつかぬうへ一が金御切や通しけん中知家
 人何りそ大に感しそ後捨並はよ唐ぬるの存てふに

園をまゝしや^{はふ}ふね^{ふね}あり室^{むろ}怒^{いかり}あがり^{きこ}我^{われ}出^で
「這^こへても喰^く物^{もの}い^いな^な」鬼^{おに}も^も我^{われ}年^{とし}れ^れ三^{さん}指^{さし}に^に「日^ひ本^{ほん}絶^たや^や天^{てん}
地^ち一^{いち}枚^{まい}何^{なん}けの^のま^まあ^あく^く孔^{こう}子^し忠^{ちゅう}賢^{けん}」聖^{せい}王^{わう}を^をま^まれ^れこ^こう^うの^の出^で
「は^はい^いく^く新^{しん}羅^らの^の賢^{けん}」^{きこ}達^{たつ}北^{きた}実^{じつ}の^のこ^こん^んど^ど変^{かは}り^りふ^ふ新^{しん}又^{また}う^うあ^あ
氣^き象^{さう}太^{たい}率^{そつ}此^{こゝ}に^にあ^あり^り

梅歌

梅^{うめ}歌^{うた}の^の序^{しよ}歩^ふ人^{ひと}は^はど^どぬ^ぬを^をき^きく^く業^{わざ}と^とな^なせ^せり^り生^{せい}来^{らい}能^{なり}
猶^{なほ}我^{われ}あ^あれ^れん^んぞ^ぞ神^{かみ}風^{ふう}籠^{かご}と^と号^{ごう}せ^せり^りも^も古^こ老^{らう}守^{しゅ}武^ぶを^をま^まさ^さふ^ふ
な^なる^る能^{なり}屋^や一^{いち}重^{じゆう}附^ふ合^がの^の区^くが^が長^{ちやう}ず^ずる^る而^{しか}あ^あり^り一^{いち}年^{ねん}如^{ごと}別^{べつ}は^は旅^{りょ}
せ^せり^り金^{きん}泥^{でい}ふ^ふて^ての^のあ^あ句^くう^う一^{いち}破^は違^{ちが}ひ^ひ件^{けん}お^おも^もう^うの^の時^{とき}「う^うの^のむ^む
け^けく^くあ^あれ^れ休^{やす}み^みの^の何^{なん}て^てあ^ある^る又^{また}「利^り業^{ぎふ}い^いあ^あれ^れと^と咳^{せき}氣^き一^{いち}て^て
居^ゐる^ると^とい^いふ^ふあ^あま^まり^りや^やあ^あ捨^{すて}ら^らい^い物^{もの}を^を塗^ぬす^すれ^れく^く此^{こゝ}に^に又^{また}

字^じを^をか^かけ^け案^{あん}は^はあ^あの^の詞^しと^と称^{しょう}さ^さる^る水^{みづ}一^{いち}と^とあ^あり^り是^{こゝ}より^{より}加^か
陽^{やう}に^に能^{なり}踏^{ふみ}あ^あ道^{みち}あ^あれ^れ半^{はん}の^の梅^{うめ}歌^{うた}の^の風^{ふう}に^に変^{かは}ず^ずと^とい^いふ^ふ後^{のち}は^は
涼^{りやう}装^{さう}世^{せい}人^{ひと}我^{われ}妙^{めう}と^と一^{いち}重^{じゆう}附^ふ合^がの^の旨^{しみ}趣^そを^をほ^ほう^う今^{いま}を^を集^{あつ}
関^{かん}する^るに^に「何^{なん}れ^れと^と十^{じゅう}日^{にち}の^の第^{だい}と^と淋^{しみ}う^うて^てと^とあ^ある^るに^に「巻^{まき}つ^つ記^き
み^みが^が来^きて^て居^ゐる^る又^{また}「玉^{たま}物^{もの}い^いる^る中^{ちゆう}に^にあ^あら^らは^はに^に懼^{おそ}れ^れさ^され^れく^くと^とい^いふ^ふ
「使^し者^{しや}一^{いち}通^{つう}り^り清^{せい}盛^{せい}で^でい^いふ^ふ又^{また}「藤^{ふじ}物^{もの}燈^{とう}の^の灯^{あかり}に^にほ^ほて^てく^くと^とい^いふ^ふ
「米^{こめ}櫃^びく^く何^{なん}の^の梅^{うめ}歌^{うた}い^いれ^れて^てと^とい^いふ^ふ何^{なん}も^もな^なら^らず^ず附^ふ合^があ^あり^り又^{また}
等^{ひつ}れ^れる^るの^の珠^{たま}く^くま^まり^りと^とも^も旬^{じゆん}に^にあ^ある^る而^{しか}の^の清^{せい}整^{せい}あ^ある^ると^と称^{しょう}嘆^{たん}
す^すべ^べー

平陸上人

平^{へい}陸^{りく}上^{じやう}人^{にん}は^はど^ど免^{めん}竹^{ちく}雨^うと^とい^いひ^ひ後^{のち}臣^{しん}人^{にん}と^と改^かむ^む江^{かう}戸^こ人^{にん}を^を角^{かく}と^と
後^{のち}く^くは^はあ^ある^る中^{ちゆう}に^にあ^ある^る河^{かう}沙^さに^に移^{うつ}住^{ぢゆう}一^{いち}て^て野^や田^{でん}泉^{せん}と^と号^{ごう}に^に「性^{じやう}く^くを^を

と流麻の本芽ふは是蕉翁蔭脂花の付て曲を奏し
て我回るに「必成や風は吹く云此川鹽喻も此意ぬく亦
何ぞ時人や「鳴あふ河越に蝶の目新く余時流餘景眼中
みたり」世成を満や就世が響雲の中徑を新き一夜
づみは響る時ぬる系「理ちや世直まつ」記「流麻」
二句とも和平「種もの老後」武形くぬり「和事」
号「流麻」宋阿といふ実係二年六月死に年六十四有六
祥世ありらるゝ有ともちらド西の要

堀内仙童

堀内仙童と武形の人活法を述ふに室永中 京洛よりて
羅人と名を号するに化術妙と号し又生長庵といふ弟子
此同成なりちりりと相若き「海嵐揚」秋風と吹く海雲と生
は東陽意の申合ふに「咲にりり西洋より大泉来王ける時
今や引く富士此裾野の垣半此句我 邦乃大徳成は隣
喻せり稱嘆をすんた存居るにけ人榮るを嗜むた
番茂雲す此此癖何王又戯画を能すを豪巧むり此
立圃許ふもとにけく減むにといふは小巻中拙づれば
事あはれ時を重録成忍ぐいてぬく福る是を画及茅以ふ
倭宗宣事のありふよ水りそ又ふり何里く種あるる
人此及びける所なり雲延元年至十月死に七十有四歳

千代女

千代めを加判松任の人少小より支考のつお格考死して種
そゆを得ず或時美濃の盧元材は跡して来水るお
そ此格考小説くお死し才子と名は画の越の異後明は後

市

市

市

市

市

市



上より或時画紙よ小漢を下にに描かれしお顔の面
面をよく画くそ下小「お良や地は怪おと我何ぶあうりこ
そ即妙きんぬ屋」始くまはるる時「描くううううぬ
と枝初葉里我子我失ひける時「描く今日の何あまめで
はるるそ情態もはと思ふ」はト先染の乙女は女は才
「又き」る端ふ「あはれぬ身は静な柳うあけ女の静
乙女は才「又き」る端ふ「あはれぬ身は静な柳うあけ女の静
同時「玉を」回「はあ」はるる「はあ」はるる「はあ」はるる
又我思ふの心を考ゆ我と回葉あまども狂の一字の静
ある所に及ぶはと情態もはと思ふ」はト先染の乙女は女は才
後乙女は才「又き」る端ふ「あはれぬ身は静な柳うあけ女の静
おとあはれぬ身は静な柳うあけ女の静

けす水長を詠くそ人の風俗を知屋

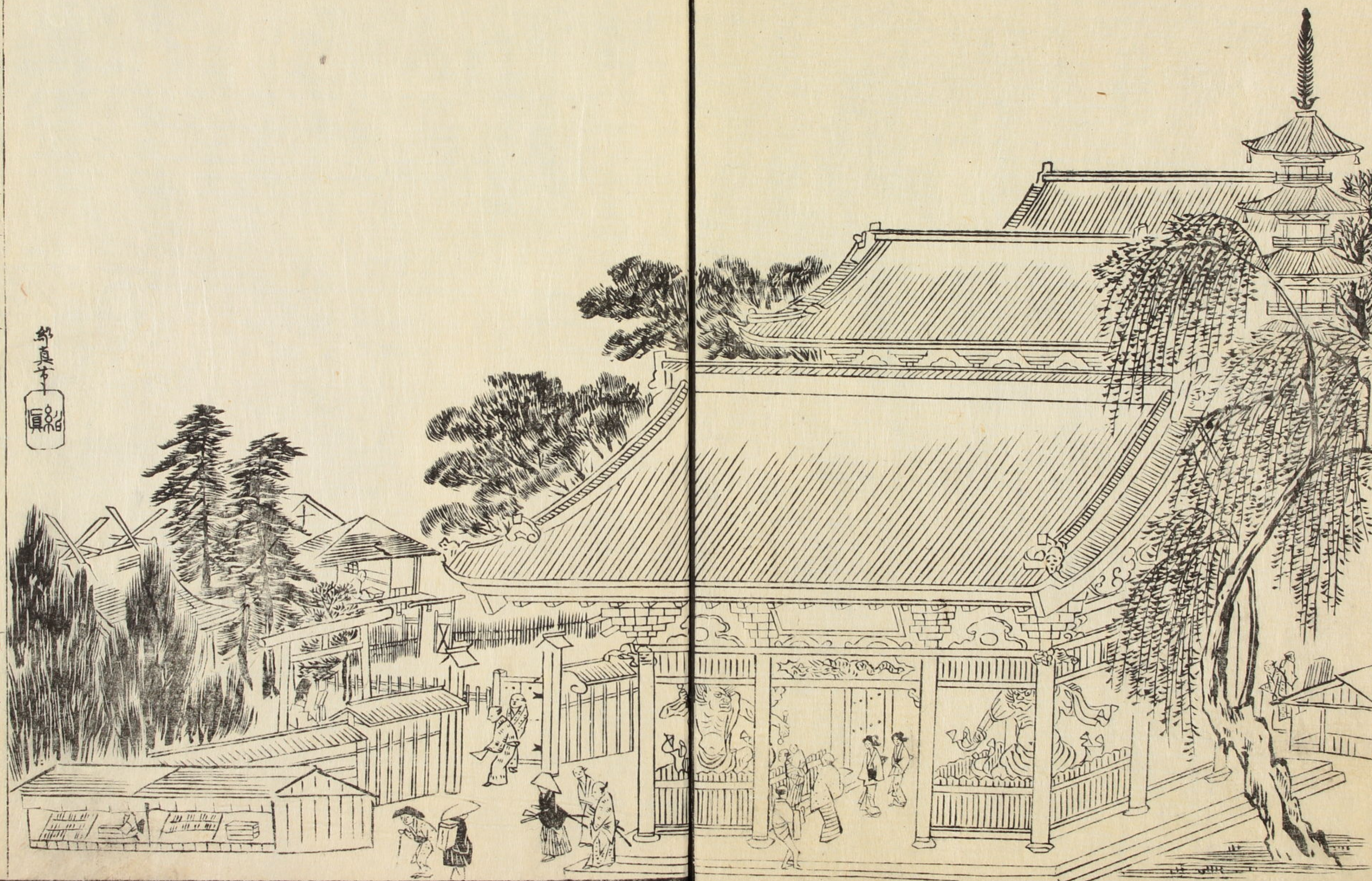
清水超波

清水長多郎はどめ味音人なり多又風俗の志何月と
仰くよ已が業成歌ふ一日俄に歌おろしと家紋の巴と長
此字を合して長巴と改むお娘一喜端が伴ひ付ひけり
端おどろいて油何がゆふふと安んずるふれ白やと守ふ世榮
此うほ片くまの如きなりと答ふ端といはく君の産まは
若くは君んふと今油が才をはうふは端の如きなり
案が律しと後なる一と後ち又依が才人達ゆ記録してつ
人といおふり端が才なる所も遠くは遠く一世の作者
とある超波と改名して獨歩庵と号し「水香に雲はけを」
初めは「理河まひの移と移」ある事減くふ又改改障

物生事ふ超波何り仏を即色是空空即色是空空色を
二重ありと此こそ人里歌うふ記略や記の血なほ是きと
山此いも和子因来に作摩生りかいらんと云咄一痛耳く入
て二端ある「河えびや膝く河がれは初まぐはえ又又年
三十六案にくと死せり

建部涼袋

建部涼袋は吸着庵と号し初名高常なる一時の野坡
はちふ後は清の百川がすくふ後ひ後白を管に振し
希國「轉記附句の勢ふ起く梅語又依る一年水玉は在
時を起固ともいなり武の清原に居る即ちてより涼袋
お風神の袋を我と改むり端を屋めてれ名成後袋あり
うそ名はめり改むり端を屋めてれ名成後袋あり
お或い袋足此時より序ともいなり画を好く字禁秘の号あり



佛家奇人談

あると答へる人ふ答へ「協定ある身に似合へばさういふと
難波の詰めあふぐー連懐くー我形を恨川風れ糸柳越えと
西宮里の河川といひー女何りおくかよひある男何り
二夜といふらで睡さるにぬる我打うみく」石水のつねで
ありや藤君淵来れ詰め何ぐー或時の吟一思ふと種下と
山形に居るふ何まの所れ娼妓をまきんぬはるのくる若もの
実情を吐おに我をのきて曲輪成りてせし中おちく藤雲
「初音や誰が涙も雪の月夜若同く」意「反復と人よあふ
洞ふふふその程情あるいふふと後客といひと聴くくどおほく
付家

仙家奇人談巻之十 大尾

おほよ我も古人のふてき家趣を志してゐたが
何つたりとあふぬる實りー古人の友とて
つあへー至心集撰集抄・隠逸傳などみなそきあり
往年花洛子三熊海棠氏あきて閑田老文能
筆哉かき崎人傳あは編をあははて大り
在にけりる俳家ももろゝそれ人なうゝむやとく
玄とーといふ人いとみその例はからいゝ仙家能
奇行あるもの文明よりあのかゝ八十餘人をあつめて
ほふみ坐右の友となす此人明を失ふゝん

りすくちといへどもよく古人は志を鑑
 らからあつてその撰は及ぶ尋常明眼の人
 心識するかなあつてと心へてや古人は
 よくあつて人なりんを難う家へての
 色をも
 冬はもろ梅のちねある處へそ
 子書る子校正
 上木へて立母披あすまへ人
 へてのめあつて
 何つくかつ孝善れ志たふとむへへ
 朽人なう存
 一語はとへてと氷黒主人ありや
 おくらる世に風雅
 をとちあふものな見るは
 抄なくも吹席を

のさしちて勝敗のむくむくいさくあはれ
 の編集あるを
 まるゝれ三子はるる流俗に出てまらぬ家
 風流ははるまゝ能くたゞるゝありとふへ
 けきして是をよみ上件の人くれうへまゝに
 六の三子乃畸人をけりといふへく於ほふ

丙子

世道法外
俳士

不隨齋成美政



豐久城録

102

玄玄居士畧傳

男 玄玄 述

先人竹岡玄玄一を據陽字勝ふ生亦成童に於て能く
明戒未ふ時より同玉加たれざるなる人の能落へ導くんと
おもふねてハ勅らせし一が身重き色を足るる何
たに何をも思ふとも甲斐なき人となつて一戒なき思
ひを尚書ふいとけや唯心と獨里心眼の眼あふんまを揚
ほちるふ若れ能する所亦亦能して一能よて足るるのみ
ちり月の色と喻けし句に感激あるより「同若くす
所」風お騒々しくと振附くる里張る一千里も一歩より起
るといふばん掛たふんは亦どうも傳受ふ能らばめやい
直ちにそつたのく「初層やあれ掉に成り初めふ里と
一句戒吐しより性く小教多の紙筆を焚せ里お

瓢水重磨と交遊して道義討論するおと他なり一
府里を去るに諸國往還するに志あり潜に亡き橋水の
間には橋を橋とす十年年去る武の江戸より東里津川
一居をトに當り沙市吾女に嫁ぐ能事を強する
茲一年あり又存義買明橋門路に去る能と教諭す
集會す明和申官勾當小進み系橋の西渡流橋又後
居を南無新といひ又竹憲と號す一必急も何とつばあ
濁りり「種小屋」も清浄の沙汰や必牡丹一回此水の水
成けり秋風年肉を春牡丹を「留」中の妻や五
之何より後妻に逢く一人ばかり死にぬといひ一
妻あり孫の形なりと許さん秋菊子といふに踏
いはく世に唱ふ秋菊子愛の計は播まざる柳の葉と
も

小食すふとは姑に姑悪での変と人おと人里に何
生を編み前子に生を利りて女お水を食すまは子
振す本妙に花を氣成動一申を冷に振る時は是
此生せばとんを教ての流ありと成人との能
我唱る者何里解く曰く牡丹は能く能く
盛況僧に屋におとあは智者なれども
我能すけは下子の一癖なるに因和歌成も
或時菅谷正女一と送れ変ふと留て申一
「秋の深ぬ本は禁いふけ」も
之にぬ一「夢」もみちあふ初一
持人よ夢も時あふ
志望に學んる代りすあり「儒士を尊ぶ」も
又

我傳ぞ一々事女家望をうて和漢の傳記我傳一む是
身此ふ明を顧るなり始々東武く来てより人の困窮我
救ふる所ありに成るや身の浮沈も亦交する或いふ
若き金銀を惜み貧乏人れ費用も惜みけり傳ていふ
有餘を換へて不足我補ふ天の道なりと云ふ應較ある
あり此女如く文化改之れ年中秋叶五月成りておあり
享年六十有之谷中長久院ふ藤依

春日有感 庭裏有梅先人常愛故詩意及之 儀洋散人

忽逢世上物華後 逝者如斯歲月空 庭際嘗聞言 如送送
中徒見餘餘梅 花似雪 閑空地 泣雪若梅 感舊時 無奈
窓前人 玄衷春風令 徧憶支離

玄玄府君與余有舊臨別指舍宿草是題

賦以寄竹子得

南窓 勝 謙

孝子其何似 周朗恩堂平 敬恭素梓 送次唐風 聲遠
傳時俗 纂編肆世名 固君追慕 切此修比 驢鳴

題俳家奇傳

水戸 森庸軒

父遺此書子刻之 風流道義具于茲 詩歌不及俳諧 妙技
直達花月師

たらちを我失くしける
こころの玉ありけり

竹内重躬

中くふ今を逢てふ 如魂や所々に増添る 此れ教
ふ此父の遺教は 重躬如くして

江戸 塙捨技

出おねー云れ禁煙や 未だなくなき人 愚ふ種こそ家から

水戸 岡田一琢

あき人の云れ禁煙くく 愚くくや 尺一面 軽も重なる

言勝

蒼谷正正

言勝

國田光令

十年ありみ一面うげも露れるに月々色ゆく手極る愛
賢あればたえぬ謙を愛するの及ぶとちのふ人のいみじ

安樂院玄玄居士

牽牛花や

まゆゑは

又の

ねがひけ



玄玄居士

うつむいてる家何里あけれ席

玄玄男

青青

露れるに十葉何ありの秋とて

玄玄妻

不英

短奇り下照

おれ世哉玄里ーたらちをの云おける文ども、初く五巻
六巻の字紙こい威ぬおふたふ考へ侍るこなつりーは
いや候ー画ゆたー年月や竹のふーぐ小續家思ひ
は屋十あり三とせれ思も素んぬはれバ匿れ才子
れー晋子ういふみも何ふんずれど懣懣すけるを志にめで
素よりお蔵ゆる者又等く諸邑風客君一句我恵ん
ふや榎林の二校崑山此序玉りーく其泉一の方向やつ
かきぐ幸ふふごとく之にはさるんじ
あさぐねやふるの竹は候とんども

青青

諸國名家追福契句并拾餘
針者不掩次序

此條所云いけり起けりて竈馬ふく
江戸
完来

障雨北中より松くや阿き北つゆ
同
送彦

並ふに露いあれども交ちては
 同
 白行

初秋や村雲はうげ地裁は——海
同 五世 宗瑞

古人曰已替了家傢少相一禁

粟飯此少人秋悲月日如系
同
宜麥

帝を祜と名定め一人を慕ふき
 同
 年心

墨染の袴——いこひ——蟲うた

せみは壳又すぐ鳴くや秋虫蟬

水の月ゐす海に三娘けふりや
同
青阿

三月の隈へ咲く紫苑の家

浮世こそ老もいぢど得るれば
同
成美

おろげにいざねをう手向ふ家
同
斗秋

文書や拘おとす法暗書本
同
四
碎

暖之 倭名 和 野 鹿 の む う ー 今

鼠尾草此水や弘誓の船なり
同
四世
一
瀧

石清水の瀦より秋のつ紀
同
三世
左
巻

琴北をの殺しやうも免ぐ候哉
同
崑山

みのむーや今もまうを啼きす
同 毎 欠佐

必兼此心——實生若金尺之也
 國
 五世
 立志

松風了十三姑緒の秋ゆり
同
二世
存義

名存や思もつらきほどすゝめ
めるも存れわらば老ぬる
山里やあどせしうもなれた
旅さねの何うさうありぬる
山井の水汲ふ事く葉のはな
宿く起て手摘ぐ柿やけさの秋
中くふ人もむおれく秋れ
いうきりや遊ぐ帰るあきの山
あけぬいで死てくれんどう消
七夕も穀でもちくはねる
書きやさうさむき癖がつく
あうねねや起く仏もをうはねず

同	甲斐	同	越後	加賀	強志	同	お探	下福	あ府	陸奥	南紀
秋舉	可紀里	嵐が	幽喃	耳谷	素葉	一葉	葛三	太節	松長	乙二	素に

米多く持くはびーねるう
舞の舞を長うするなちう
虫をれあどおぬるのたも
秋秋のなつたやすー
魂をさうなうせねひり
おきどあもあうねど桐を
稲妻にけさうと痛る葉屋
いあつちや獨りおちく
附ていふ諸王英士の秋
許多あはれ秦胡道
以てれやああり

同	因幡	豊後	長崎	肥後	安藝	松前	薩摩
平角	雷沙	月化	鞠風	並竹	管光	布席	潮雙



